

幼児の考えを生かした 保育の工夫

紺野長子

年少組よりも年長組、一年保育より二年保育の級は、保育の流れが子どもたちの考えをより強く反映してゆくし、また、最初にたてたカリキュラムも、子どもたちが意外な方向に肉づけをしてくれ、豊富にしてくれるものである。それは子どもたち自身が、集団生活に馴れ精神的にも身体的にも伸びてきた頃、子どもたちは外に向かって、驚きや、発見、そして飽くことを知らない関心を強く外に向かって示しはじめる。それをとらえてゆくことは、子どもたちと共に生活しているとあまりにも、しばしばあって、かえって見逃してしまいがちなこともある。いつもおとなである教師が子どもたちの心の動きに対して新鮮な目をもっていなければいけないということを、胸にたたんで保育に当らなければと思っている。

現在私の級は二年保育の年長組である。この中には三年保育か

らに園しているものが、十名（男四名、女六名）含まれているが、年長組として一学期が経過した現在、園内におかれた遊具を実に工夫してよく遊び、またどこからか石、木切れ、棒などもよく見つけて来ては利用している。

六月の中旬すぎのこと、お弁当もすみ、庭には子どもたちの元気な姿が躍動している。相変わらず砂場には男の子たちが十人位かたまっている。私の級の最も精力的な面々である。しかし今日は橋をかけたリ、トンネルをほっている様子ではなく、じっとしている。「あっかえってきた」という声に、見ると向こうの庭からかなり太い棒を片手でささえて「ちゃん」が走って来た。息をはずませ、汗びっしょり。「今度はぼくだぞ」と「ちゃん」が言う。みんなは砂の山に棒をさし、くずれないように固めはじめた。その棒は五十センチ位あり、先がけずられてあった。「はっしゅ、五び

ようまえ、一びようまえ」「ばばーん」一斉に声がかかるとHちゃんも両手で棒をぬきとり、一散に馳けだしていった。「せんせーこれはろけつのはっしやだだよ」「つきにちゃくりくしてくるんだよ」とリーダーのTは得意そうだった。「ぶつからないようにしてね」と助言をして私はジャングルの方へ行く。遠くから見ているとその子どもたちは根気よく順番が来るのを待ちながら、繰りかえし遊んでいる。その頃ソ連では相ついで人間衛星船が打ち上げられ、子どもたちもしきりに会話にのせていたが、話しあいに取り上げただけで特に保育内容には入っていなかった。

帰る時間までロケットでかけまわっている子どもたちの姿は私の目をとらえた。「今日はロケットごっこおもしろかったでしょう」と皆が集まった時に話すと、「せんせーうちゅうりょこうしてたんだよ」「つきのせかいはからだがかくなるんちゃうんだよね」「いまもとんでいるんだよ」としきりその話はずむ。翌日Kちゃんがテレシコワさんの写真を切りぬいて来た。

子どもたちの考えていることを大きくとらえてみたいと思つた。そこで黒いラシヤ紙を机に拡げると、いちちはやく子どもたちととりかこむ。「ここは宇宙よ」と言っただけで「せんせーえんばんんかいていい?」「うちゅうステーションもかくよ」「ロボットもいいでしょう。エネルギーを出してどぶんだよ」と大きわぎになる。クレヨンを出して来て、代る代る宇宙旅行の絵をかく

ことになった。後は私の手を出す余地は全くなかった。とくに男の子たちの活躍ぶりはめざましかった。「ヴォストーク五号かいだよ」むずかしいことばもよく知っている。ピービーピー、キーン、キーンと通信音まで入り非常に賑かだ。見ていると実にこまかい構造なども書きこまれ、「ここから切りはなせるんだよ」「ここはいりぐちだよ」「アンテナもかくんだ」と思い思いの色でかかれたロケット、円盤、宇宙ステーション、ロボットなどどころ狭しと飛びまわった大宇宙がかかれていく。おとなしいMちゃんも自分の領分を犯されないように、人のひじの下からクレヨンを熱心に動かしている。

私はあらためて子どもたちの興味と関心とその知識に目をみはつてしまった。と同時に、こうした子どもの考えから発展したものには、どの子どもも素直になかに入つて来て、しかも楽しさと精気がみなぎるようだ。その協同画を少し高く壁にはつたが皆でみあげている。これだけでは平面的に終つてしまう。昨日、棒のロケットで馳けまわっていた子どもたちに、画用紙、セロテープ、ホッチキスなどを与えるとたちまち目が輝いて、ロケットの製作がはじまった。画用紙を円形にまるめて自由に作る。赤い紙テープをロケットの火にして、絵の具できれいにぬる。でき上つたロケットをもち室内、テラス、はては遊戯室まで進出してかけまわり、遊びがすんでは室内に糸でつり、子どもたちは第一

号、第二号と教えたりして、しばらくの期間、よりつよく子どもの心は宇宙に向けられていた。

この保育の流れは月案には全く予想していないことであった。また、五月の末のこと。新しい三輪車が級ごとに与えられた。

三輪車遊びについて、一応のきまりを話しあつてから、子どもたちは早速庭先に出る。そこは広いコンクリートで、絶好の運転場だ。長い列を作つて、ただ代る代る乗つていくことから、すぐに子どもたちは発展していった。一人が真ん中に立ち交通整理をはじめたのである。Aちゃんが「せんせーチョークかして、みちをかくの」と走つて来る。「せんせーおうだんほうをかいて」と言われ、真ん中にやや広い道を横切つてかいてやると、後は大勢の子どもたちがうねうねと線路をかき、三輪車はその通りにはしつて行く。しかし手ぶりと口で、「ストップ」「オーライ、オーライ」といったりするだけではどうも物足りない様子だ。すぐに呼笛といつか遠足にもつて行つた赤い旗を出して来て渡す。すると一段と遊びも生き生きとしてきた。何人かは用事も無いのに何回も横断歩道を渡る。おまわりさんに指図されてその通り動くのが楽しいのだ。犬になる子どもも出て来た。両手をついて歩き「いぬだってふみきりは止るよ」などと言う。急に単なる三輪車遊びから交通あそびに発展していったのである。

全く子どもたちだけがお互いに約束を守り、大勢の子どもたち

がそれぞれ、つながりをもちつつ、自主的にあそびを展開していったことは、如何にも年長組らしい風景であった。その間教師である私がしたことは、旗と呼笛を一人の子どもの活動から、思いついて渡しただけであつたが、この交通あそびはかなり長い期間続き、他の級にも反映していった。遊びの後、交通のきまり、乗物について、実際の社会生活にむすびつけて話しあいをしていくことはしめくくりとして教師がもつていった。

このように自然のあそびの中から、子どもの興味や考えを反映させながら、話しあい、絵画製作、自然観察、リズム遊び、そして社会へのつながり、などと保育の目標にもつていくことは非常に多いし、それが実に大切な事だと思う。そしてこれを発展させるには、常に適当な助言と発展しやすい方向に導いていかれるような環境設定が必要であるし、また教師が子どもと同じように、興味と感受性をもっている時に、子どもの考えは生かされ、発展していくのだと思う。

あらかじめ主題と目標をもつて組まれたカリキュラムも、実践にあたっては、すべて子どもの考えが自然な形で生かされるよう、巾を持たせ弾力性にとんだものになるように、やはりその場面、場面にあたって子どもの心を深く洞察できなければならないと思われる。

(洗足学園幼稚園)